

義倉条約

新建義倉一永代可救窮民一条約

1 一 当所百姓町人、大小不拘連衆を相催シ、姑定メ二等級一
依此ニ毎年麦を出シ可申事

- 上等 麦四石
- 上次等 同三石
- 中上等 同式石
- 中次等 麦壹石五斗
- 中下等 同壹石
- 下上等 同七斗
- 下次等 同五斗
- 下末等 同三斗

右八段ニ等級を立テ、当丑年より戌年ニ至迄十ヶ年之内、
毎年麦を出シ申候、但家産之厚薄を不レ論、只義志
之浅深ニ任せ、少も是を強勸不申候、倉を義倉と称
シ候得者、連衆を義衆と名付、所口レ出ス之麦を義麦と
名付、記録帳面を義帳と名付、子々孫々ニ至迄固ク義を
結ヒ約を守リ相続可被致事

2 一 当所ニ檀家所持之寺院之現住五人を義衆中ニ加ヘ申候、
是者人数少キ故ニ而ハ無之候、沙門者濟度を職分ニ被致
候得者、義倉一件之書記類右五ヶ寺ニ留置キ、後來照管
を相托可申事

3 一 毎年六月二日、義衆会合可被致候、是を修義会と名
付候而、義麦之出納・義帳之勘定相互ニ可被致候、右五
ヶ寺輪番ニ可為会合所事

4 一 毎年所出之義麦を義衆中江分配シ借受候而、一年ニ付
十分一之息麦を出シ年々相殖可申事

5 一 相催候義衆、仮令ハ六拾人有之候ハ者、即分属して、
六人ツ、一組と成、十組三分ケ可申候、且又毎年於ニ
会合所ニ圖を探り候而十組之分属を相定可申事

6 一 今年各被出候義麦、仮令ハ都合五拾石有之候ハ、即五石
ツ、分配シ、十組江借受可被申候、来年六月迄二十分一之
息麦を相添、会合所江持参可被致候、ヶ様ニ致ニ区処一候
而十箇年之限を満候得者、凡元麦五百石、息麦三百石、
都合八百石ニ相成候事

7 一 義衆を十組二分チ、義麦を十科二分チ借受可申候、但十
組之義衆各々連印之証券を出シ、義麦一倍之質物を可

被載候、且毎年六月、於テニ会合所ニ相互ニ受勘定、証
券書改メ可被申事

8 一 五箇寺者雖レ為ニ義衆一、義麦借受被申事有間敷候、然者
探レ圖十組ニ加ヘ候ニ不及候事

9 一 十箇年以後者如レ前致ニ区処一候而毎年息麦八拾石有
之候、是を義衆江配分シ取り可申候、但義帳面ニ引
合、各々所出之義麦之多少ニ随ヒ相分チ可申候、每
年如此致候得者七年にハ元麦を不残返弁申候而、息
麦猶六十石余り候様ニ相成候事

10 一 初年より已後十六ヶ年之内ニ者、仮令飢饉有之候共、義麦
を少も不レ致二分散一、区処之法を相守リ可申候、十七年已
後者専救窮民一、備ニ飢饉ニ可致申事

11 一 十七年以後者区処如前、但シ卷ヶ年之息を式十分一
ニ相定申候而借受可被申候、然者毎年息麦四拾石有
之候、右息麦之内五石を五ヶ寺江毎年寄進可被致候、余
麦三拾五石を以、鰥寡孤独を救可致申候、最義衆
之子孫ニ困窮人有之候ハ者格別ニ救可申事、可レ為ニ
義倉之第一義一、努々疎略存シ申間敷事

12 一 年限之内、義衆之産業ニ盛衰有之候得者、從半途一義
麦難出者可有之候、少も不苦候、其由義衆中江披露之上、
降レ等可レ減レ数候、少分シ出候事も不相成候ハ者残念
成事ニ候得共、致方無之候、其人出置候元麦・息麦共早々
致返済、義帳面之名を除キ可申事

13 一 從半途義衆ニ加リ度相望申輩ニ者、其産業相応ニ義麦之
数を定メ、初年より其年迄之元麦・息麦一度ニ出させ、
義帳ニ名を書入可申事

14 一 義衆之中、万一非義を相構ヘ義倉相統之妨と相成候
ハ、右五ヶ寺再三教訓可被致候、果而不相改候ハ者、
義衆僉議一決之上義帳之名を削可申候、若義衆之力ニ
不能候ハ者、官府江訴出候而御裁判を奉受、義帳之名
を削可申候、但、於二十六年以前ニ者、其人出置候元麦
を返与ヘ、於二十七年已後一者息麦を遣シ候而永ク可レ
令ニ義絶候一事

15 一 他事ニ付義衆不和之事有之候ハ、是又五ヶ寺より挨拶
を加ヘ和順を調可被申事

16 一 十七年已後者、息麦ヲ以、毎年鰥寡孤独之者を五ヶ寺よ
り尋出シ、義衆之沙汰ニ掛候而員数を定メ、麦を受取、
從三五ヶ寺ニ可有施行事

17 一 飢饉之年者、義衆茂生業ニ開敷候得共、自レ冬至レ春義麦
施行之事、五ヶ寺并ニ義衆輪番ニ立合候而嚴重ニ可被ニ賑
給セ一事

18 一 凶年之形勢者秋中ニ相知レ候、米ノ価ニ伴候而麦之直段
貴事人々存知之上不及申候得共、左様之年ニハ不レ失ニ
時機ヲ一各借受候義麦之数を尽して早速可被弁備候、万

一遲滞之輩有之候ハ者義衆一同ニ催促可被致候、猶及不埒候ハ者証文ニ載候質物を請取候而急ニ義麥を買備可申候、義衆中ニ而不相濟事有之候ハ者官府江訴出御裁判奉受可申候、義衆之親ミを不願候事非二本意一候得共、衆民之困窮を救候義倉之主意ニ候得者、老人之困窮ニ難替道理ニ候事

19 一飢饉後、義倉之空虚不可捨置候、重而義衆を相催シ補虚可被申事急務ニ候、区処者最初之法ニ相倣ヒ可被申候、但シ旧義衆没落、新義衆参入之事可有之候、若倉中ニ残麦有之候ハ、如前年式十分一之息ニ而旧衆中江借受、備ニ飢饉ニ候事勿論也、新衆相催候義麥者、如二最初十分一之息ニ而又々十六ヶ年之内、約を相守り、相殖シ可被申候、年限之内無恙相殖候ハ、旧義麥をハ旧衆へ分取可被申事

20 一当所・他所之寺社勸化等之事ハ勿論、右五箇寺之祠堂寄附造営勸化等有之候共、義麥を堅ク不可取用候、猶且、緩急湊功之術、決而不可許容事

21 一当所御年貢并諸役・雑用等、緩急湊功致間敷候、仮令官府之為御用とも緩急湊功仕間敷事

22 一如右致区処候ハ、永代無二退転一相続可致道理ニ候、百姓之重宝、町家之利潤不可過之候、雖然、有始者必有終習ヒニ候得者、時變ニ逢候而前法ニ而義倉相続難成事出来候ハ、其時所レ有之義麥を無差別平均ニ義衆江配分シ可被取事

義倉條約畢
右義倉之一件、大略如此ニ候、熟覽之上得心之方者、義衆ニ参入可被成候、於不得心者強而勸メ不申候故、先達而記録を致、披露候人数相定り候ハ者、義倉一区并御墨付被為下置候様ニ連印状を以御役所江願上可申候、将又私兩人致発起候得共、義衆ニ者相加り不申候、其故者後來之利潤を相謀り、右一件致発起候様ニ万一外議起り候ハ者義衆疑念出来候而義倉不成就之基と可相成存候、因是功成身退之道ニ從ひ候而畢竟之監護を五ヶ寺ニ相托、私兩人者暫義倉成就迄之媒介を相務迄ニ候、已上

明和六年 播磨屋安右衛門
丑二月日 義倉発起 岡 雲 臥

- 義倉監護 觀龍寺 密城
- 誓願寺 濟譽
- 同 本栄寺 日侃
- 同 地藏院 義証
- 同 教善寺 了石
- 庄屋 孫大夫
- 妹尾屋茂右衛門
- 錢屋 惣左衛門
- 井筒屋伊左衛門
- 和泉屋茂兵衛

- 大島屋次郎右衛門
- 油屋 三五兵衛
- 俵屋 亦五郎
- 宮崎屋 五蔵
- 葛屋 弥三右衛門
- 児島屋武右衛門
- 成羽屋与三右衛門
- 広田屋紋右衛門
- 沢屋 善兵衛
- 稲葉屋藤左衛門
- 灘屋 吉兵衛
- 内田屋五郎右衛門
- 内田屋又次郎
- 竹原屋嘉右衛門
- 駒屋 忠次郎
- 坂本屋 源蔵
- 中島屋平右衛門
- 板屋 仁左衛門
- 広島屋惣兵衛
- 油屋 嘉兵衛
- 松屋 左兵衛
- 平松屋平右衛門
- 児島屋太次兵衛
- 児島屋助四郎
- 関屋 重左衛門
- 貝屋 忠左衛門
- 新屋 文平
- 大村屋弥平次
- 平野屋新五郎
- 土佐屋左兵衛
- 堺屋 半十郎
- 板屋 与八郎
- 有木屋四郎右衛門
- 福山屋太兵衛
- 阿波屋七兵衛
- 八浜屋又四郎
- 八浜屋弥兵衛
- 黒田屋弥四郎
- 真澄屋権兵衛
- 田中屋伝兵衛
- 茜屋 平次郎
- 桜屋 又兵衛
- 酢屋十郎左衛門
- 亀田屋 次助
- 和氣屋喜右衛門
- 丁子屋伊右衛門
- 日野屋孫兵衛
- 伊予屋幸太郎
- 大坂屋源十郎
- 坂口屋文兵衛
- 三好屋甚兵衛

岸部屋助左衛門
 榎屋 文右衛門
 荒物屋安右衛門
 惣社屋忠兵衛
 安房屋市右衛門
 讃岐屋与右衛門
 室屋 与十郎
 杉屋 甚三郎
 吉和屋伊右衛門
 郡屋 清兵衛
 猶田屋 幸介
 政屋 善次郎
 柳屋 次郎兵衛

義衆都合七拾四人也

明和六年

丑六日

右条々永不可違失者也

明和六五年六月 野彦右衛門 御判

〔付紙〕
 〔右者義倉条約写奉差上候、以上庄屋年寄百姓代連印〕

天明八申年 五月

約外追加 丑七月 福島 祥安

同断 日野屋利兵衛

寅六月 三国屋 東作

同断 八浜屋 忠蔵

文化八 未六月 花屋 善左衛門

同 阿波屋 貫助

〔付紙、位置不明〕
 〔不如意之由断ニ付、出銀元利相渡し、義衆相除申候〕

史料2

（倉敷市所蔵倉敷義倉文書二一）

質入申屋敷之事

所中町

一水夫屋敷ヶ所 当時又五郎所持 東 十之兵衛屋敷切

高六斗七合 南 川端切

北 町切

右質入銀貳貫五百四拾五匁四分五厘

右者、無抛入用ニ付、書面之屋敷当六月十日方来ル午

六月十日迄致質入、銀貳貫五百四拾五匁四分五厘借用申処

実正也、然ル上者御年貢諸役貴殿方御上納可被成候、

若年季明ニ至不請戻候ハ、致流地ニ候、其節一言之

儀申間敷候、仍為後々村役人加印質地証文如件

借主俵屋 又五郎

安永二年巳六月十日 証人伊予屋 徳右衛門

義衆中

右水夫屋敷又五郎所持相違無之候、以上

庄屋 孫太夫

年番年寄 茂兵衛

百姓代 伊八郎

史料3

（倉敷市所蔵小野家文書一〇七・八・三）

義麦を以窮民可救条約有之

候得共、猶当六月於会合所賑給

取計方申談候趣意書

一鰥寡孤独之者勿論、格別之窮民

或者妻子有之候も親類無之もの重病

ニ而家業出来兼、朝夕之給物貯無救難儀

致候者折々有之趣ニ相聞歎敷事ニ候、右様之

もの考、義麦を以賑給可致事ニ候得とも

自然不行届儀有之ニ付、尚又此度義倉

会合所ニおゐて申談、五ヶ寺并村役人

発起兩人共村内得と遂穿鑿義衆中も

被及聞候ハ、早速右之内江為知被申候而

毎年二月十日・六月十日・八月十日・十一月十日四度

致集会銘々承出候窮民・難儀人之趣

得与咄合、其軽重ニ随ひ義麦之員数を定

五ヶ寺江渡、其々行届候様賑給可致、重病

相煩給物等貯一向無之飢渴同様ニ而服薬

等も得不用、無抛病死いたし候姿之もの有之

集会定日迄延引難致程之義者、臨時ニ

申談義倉之員数凡ニ定、五ヶ寺江渡先ツ

施行致置、右集会之節外一同得与申談

弥員数を定賑給可致候、毎年六月十日者

義麦勘定会合定日ニ付、義衆一同江右賑

給致置候趣及沙汰可申候事

一窮民并鰥寡孤独之者江夫食として

義麦代り白米ニして一日老人分式合ツ、

是迄施行致来候得共、一日之夫食ニ者之敷

候ニ付、当六月十日会合之節申談、以後者一日

老人分白米三合ツ、施行可致積ニ定、取計

方之儀^者是迄之通^二候、尤飢饉之節^者
先規之例有之候間、先例^二任せ可申事
右之通申定候上^者、相互行届候様遂穿鑿
候^而賑給可致候、已上

五ヶ寺
村役人
文化十二^亥年六月十日

義衆
發起兩人

史料4

(倉敷市所蔵井上家文書九・一〇・一)

一 五月三日水沢方呼^二參罷越候所、惣平方願書
差出候由噂有之、尤未合役汶四郎^江相談無之
間、相談之上^三而願書相みせ可申由^二付帰ル
一 六日呼^二參願書及一覽^二則左^三写ス

乍恐以書付奉願上候

当村義倉銀之儀^者、村内窮民救為手去ル明
和年中百姓共分限^二応し出銀仕積立年々貸
附、以利息有余相殖し、貯置候銀子^二而既^二其節
御支配 御代官様^二奇特之段 御賞美之上
永々不可遺失旨之 御典書被成下置義衆
一同難有仕合^三奉存、別定約之趣意堅相
守 数十年來相続仕、然ル処近來引受
世話仕罷在候三人之内式人者相退、素方

頭取ハ六左衛門相勤罷在候儀^三御座候処、性質
柔弱^三而、利欲^二迷ひ正路之取計ひ難
出来、追々定約^茂破却同様猥^二相成

附^而ハ貯銀高年々減少仕、此俣仕置候^而ハ
畢竟潰之基、當時窮民^而已ならず一村
之大大患、義倉發起之本意^二無之候、重々
歎敷次第、最早等閑^二難仕不得止事

奉願上候、乍恐此段御賢察被成下、何卒六左衛門
御召出し御吟味之上、以 御威光急度相退
候様^三仰付被^下度、以後引請世話人之義^者
義衆之中方義理相弁候篤美之者

両三人御撰出し、定約之通專取計候様
被 仰付被下置ハ、一村永々凍餓之民
無之、広大之御慈悲難有仕合奉存上候、
義倉定約書物相添奉願上候、尚巨細始
末^者乍恐口上^二而奉申上候、以上

当国窪屋郡倉敷村
百姓

文政寅年五月 惣 平

古橋新左衛門様
御 役 所

右一覽之所惣平老人申立候由、可退道理^二
無之由後見迄相立候所、其趣意一寸相認差
出可越由^二付、尚なし^二して左之書付相渡ス

口上書 半切紙^二認水沢^江持參

義倉方引請之儀^二付、惣平方私相取

御役所^江差上候願書之趣被仰聞承知仕

候、義倉之儀ハ、私先祖雲臥外發起いたし
候以由緒從來引受請相勤候得共、義衆
一同衆評之上相退道理^二致一決候上ハ
格別、惣平老人^三而彼是申上候由相止候儀
決^而難仕義^与相弁申候、村役人御衆中
^二而も御一同義衆之義^三候得ハ、別段之
趣得^与御勘考之上御取計ひ可被下候、以上
五月六日 六左衛門

史料5

(倉敷市所蔵倉敷義倉文書一四・一)

差出申一札之事
一捨子老人 名伴藏
右^者、去々西年御会所御門前^二有之

私^江御預被成養育料として毎月七五銭
三拾匁宛私^江被成御渡儲受取申候処相違
無御座候、然ル処今般金式両御添私^江御渡切^二
相成儲受取申候処相違無御座候、然ル上^者大切^二
養育可仕候、以降養育料之儀聊申間敷候、
依之一札差出申候処、如件

新川町 善 平[㊦]
天保十己亥年七月 加判 宮原幸六[㊦]

義衆中